

## 経済問題

一八〇〇字

御存じのように、今、アメリカの経済減速が思った以上に進んでおります。皆様方は多分こういふ言葉を御存じだと思いますが、愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶという言葉がありますが、私のは持っている感覚では、一九二〇年代末から三〇年代にかけての展開と全く同じ展開になっているというふうに私は考えております。一九二七年に金融恐慌があり、その後、過って、グローバルスタンダードという形で金本位制に突っ込んで、井上準之助が濱口内閣のもとで大恐慌に突っ込んでいってしまったという展開と同じです。

ITの話になりましたが、あのときも、モーターゼーションとハイウエーの両者の連関の中でアメリカだけが最後に残って、そこにお金がラッシュのように入って、最後はクラッシュに行つたわけです。今アメリカ国内でグリーンズパン神話は崩れつつありますが、あれは、今まで成功したのはすべてクラッシュ型です。暴落直後の金利引き下げであります。ITバブルのはじけ方は極めてゆっくりとした形で進んで、実体経済に入ってから、利下げが今行われております。

状況の深刻さというものをまず認識しておく必要があります。そのもとで、財政を効率的に、最も効果的に使わないで、どぶに捨てるようなやり方をして財政赤字を累積させていけば、不況のもとでは実は国債の信用が失われるという事態がおいおいやってくるかも

しれない。これは来るかもしれないであつて、今すぐ来るとか、いつ来るとかいうことは断言できません。

ただ、申し上げておかなければいけないのは、まさに歴史に学ぶとするならば、今の時点で引き締め政策を強行するということはほとんど不可能であります。残念ながら、一部の建設業や流通業を含めて、倒産の危険を抱えております。既に不良債権問題は倒産型になっております。

倒産型になっている形の中で問題なのは、合併をして支払い不能にならない形式は、実は戦前、もう一県一県一主義でやっております。問題は地方の中小金融機関であります。皆さんの選挙区であります。そこは、実は引き当て不足と、自己資本比率を満たしておりません。非常な足りないもので、実はそここの倒産のケースの場合にも地方銀行は赤字に転落しそうになるというケースや、ちよつと具体的な名前を挙げられませんが、ある建設会社の債権放棄をするときに、北陸のとある地方銀行がそれを拒否する。百億、二百億は、中央の銀行でははした金なんです。地方にとっては実は非常に深刻な事態です。

グローバルゼーションの中で、グローバルスタンダードに対してモリスク感覚がないまま、突っ込めば日本の仕組みは全部変わるというような、非常に短絡的な議論をしてまいりました。これはもうほとんど間違いです。なぜか。我々の国は改革しなきゃいけない。例えば国際会計基準に合わせて会計を透明化しなきゃいけない。しかし、この年金の状態、厚生年金基金を自由化してどんどん代行運

用で自由運用させておいて、穴があいている状態で年金債務の開示義務を強制したらだめになるのは当たり前ですし、不良債権処理もしっかりしていないのに時価会計主義をやればだめなものもはつきりしていますし、雇用に対してきちんとした社会保障制度もないのにキャッシュフロー計算書を入れればだめになるのは当たり前なんです。ペイオフ制度についてもそうです。きちんと整理していません。まやればアメリカとは意味が全く逆になってしまいます。こういう事態に今立ち至っている中で、不況が長期化していく可能性を我々は今も抱えているわけです。

しかし、今までの景気対策では逆に悪くなる、リスクが積もってしまう、こういう状況に置かれているんだということを認識する必要があります。今の状況に対する正確な認識がなければ今の政治家は歴史の汚名を着ることになるんだということに私は確信を持っています。

今、いろいろな意味で制度が転換する時期であります。このときに、今言った形で、一つ一つのリスクに対してどういう改革をしなければいけないかというきちんとしたビジョンもないまま突っ込んでいく、景気回復の見込みもないにただただ公共事業をやっている、どんどん国債が累積するばかりなわけです。今、貿易赤字があつて、一応マクロのバランスでは、国内の貯蓄があるために表面的に出てこないだけあります。不況が深刻化していく中で、財政赤字がこの先どこまでいくかわからないという不透明感が広がれば、これは国債を持っていると危ないということになりますから、そう

いう形で暴落して、長期金利が上がるといったシナリオが一番悪いんです。これを防ぐためには、中央銀行が引き受けたり、さまざまな非常手段をとらなければいけないという事態に必然的に入っていくというのが、過去の歴史の教えるところでもあります。